

認知スキーマの描きをめぐって

外国語活動においては、具体的スキーマの拡張や明確化に焦点を当て、そのために鍵概念や教科独自のアプローチを具体的に描くことが非常に重要であることが議論されました。

ここで改めて、外国語活動と外国語科の役割を見てみましょう。



【外国語活動（第3・4学年）】・・・具体的な体験を通じた「素地」の育成

外国語活動の目標は、文部科学省の学習指導要領において「外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養うこと」とされています。

内容の重点は以下が挙げられます。

・音声やリズムへの慣れ親しみ：「外国語の音声やリズムなどに慣れ親しむとともに、日本語との違いを知り、言葉の面白さや豊かさに気付くこと」が重視されます。これは、具体的な音の感覚と結びつく「基礎的スキーマ」の形成を促します。

・基本的な表現への慣れ親しみ：「身近で簡単な事柄について、外国語で聞いたり話したりして自分の考えや気持ちなどを伝え合う力の素地を養う」とされており、具体的な場面で基本的な語句や表現を用いることを通して「具体的スキーマ」を拡張・明確化することに焦点を当てています。

・体験的な理解：言語や文化を「体験的に理解を深める」ことが強調されており、具体的な活動を通して実践的に学ぶことを通して、具体的な知識やイメージが形成されます。

これらのことから、外国語活動は、具体的な事物や活動と結びついた言語表現に触れ、それらを用いてコミュニケーションを図る楽しさを体験することで、具体的スキーマの拡張や明確化を主に行う段階であることが伺えます。

【外国語科（第5・6学年）】・・・「基礎」の育成とより深い理解

目標：外国語科の目標は、「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して、コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を育成すること」とされています。

外国語活動からの発展的な内容は以下の通りです。

・読むこと・書くことの導入：外国語活動では「聞くこと」「話すこと」が中心ですが、外国語科では「読むこと」「書くこと」が加わり、文字や文構造への意識が高まります。

・情報や考えの理解・表現：「簡単な情報や考えなどを理解したり表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力」の育成を目指し、単なる慣れ親しみから一歩進んで、より論理的・構造的な側面へと移行します。

・言語や文化の背景にある理解：「外国語やその背景にある文化を、社会や世界、他者との関わりに着目して捉え、コミュニケーションを行う目的・場面・状況に応じて、情報を整理しながら考えなどを形成し、再構築すること」という「見方・考え方」が重視されます。これは、言語の背後にある普遍的なルールや文化的な概念といった、より抽象的な知識構造、つまり抽象的スキーマの形成を促すものです。

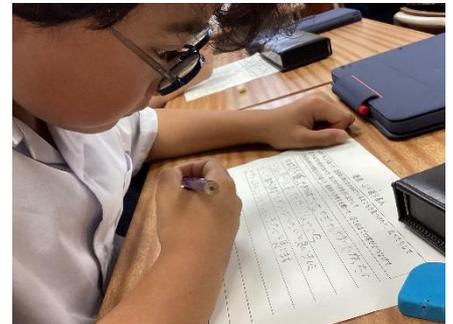
これらのことから、外国語科は、外国語活動で培われた「素地」を基盤とし、より多様な言語活動を通し

て、言語の構造や文化的な背景に関する抽象的スキーマの形成へと進む役割を担っていることが分かります。

もちろん、外国語活動においても、例えば「英語と日本語の数の数え方のリズムや発音の違い」に気付くことは、言語には多様な表現があるという抽象的スキーマの萌芽として捉えることができます。例えば、カードゲーム「UNO」を通じて英語の数を意識したり、外国にルーツを持つ子供のじゃんけんの表現に触れたりする中で、異なる言語の存在やその多様性を直感的に理解する経験は、後の抽象的スキーマ形成へと繋がる重要な機会です。しかし、その「抽象的スキーマの形成」が活動の中心的な目的となるわけではありません。むしろ、具体的な表現を多く経験し、それらを通して「英語でコミュニケーションができた」という成功体験を積むことが、高学年以降の抽象的スキーマ形成への「学びに向かう力」を育む上で重要になるのではないのでしょうか。

一人一人の子供の可能性を信じ、その個性を最大限に伸ばすために……

「一人一人の子供の可能性を信じ、その個性を最大限に伸ばす」という我々教職員の願いを実現するためには、○年●組の子供たちならではの「いま」を的確に捉えることが不可欠です。この「いま」を深く見つめることは、子供たちがどのような認知スキーマを持っているのかを想定し、その変容を促す学びをデザインする上できわめて重要な出発点となります。



本研究計画書では、教師が「学びの伴走者」として、子供たちの学習意欲や既有知識、学習スタイルといった多様な実態を「教科」「発達」「学級」の3つの視点から多角的に把握することを課題Cとして明確にしています。これは、他の学校や学級には当てはまらない、このクラスならではの学びを共創するための不可欠な要素です。

そして、この子供たちの学びの実態に基づいた「そこでしかできない授業」を創造していくために、「共創的学びのシナリオ」があります。このシナリオは、単なる活動の羅列ではありません。子供たちの「いま」から想定される認知スキーマの変化や「学びの中動態」といった、学びのプロセスそのものを緻密にデザインするものです。

本研究では、教師が一方的に教え込むのではなく、子供一人ひとりの認知特性や発達段階、興味関心に応じた複数の学びの道筋を用意し、子供たちと共に学びを創り上げていく「共創」の視点を重視しています。今後の実践においても、この「共創的学びのシナリオ」を精緻に描いていくことで、子供たちの可能性を最大限に引き出し、「心豊かで実行力のある子供」の育成に繋がるものと確信しております。

(木村 仁)